地域の中の生涯学習活動としての文庫・図書館作り運動

北　嶋　武　彦
（東京学芸大学）

はじめに

本稿で紹介した２つの事例は，地域における文庫運動及び図書館作り運動を通して，母親みずからがさまざまなことを学び，経験を豊かにし，視野を広げ，地域の中で自主的な生涯学習活動を展開している東京・大阪における実践事例である。

この小論は，こうした地域の中の生涯学習活動としての文庫・図書館作り運動の沿革と現状及び今後の課題についてのべたものである。筆者のねがいを快く御承諾の上，御多用のところ事例をお寄せ下さった前橋房美（三鷹市地域・家庭文庫親子読書会連絡会），田中和子（泉北教養講座）の両氏に厚くお礼申し上げる次第である。

1　文庫・図書館作り運動の沿革と現状

ここでいう“文庫運動”とは，地域社会の公共施設などを利用し，多数のボランティアにより運営される地域文庫や特定個人が自宅の一部を開放し運営する家庭文庫に関する諸活動を指す。また，“図書館作り運動”とは，地

域住民が住民運動の１つとして，みずからの学習・読書の場としての公立図書館の改善・充実や新設を地方自治体に要求する運動を意味する。

わが国における文庫・図書館作り運動は戦前にも存在していたものと思われるが，あまり明確な記録はなく，活発化したのは戦後，それも昭和40年代に入ってからのことである。

たとえば，日本図書館協会では昭和34年，「こども図書館の手引」を出版したが（本書は地域文庫，家庭文庫に関するわが国最初の出版物と思われる），同書巻末に掲載されている「私設こども図書館名簿」には全国合せて85の地域・家庭文庫が収録されているにすぎない。(1)

昭和40年代に入ると地域住民の自主的な運動として各地に地域文庫，家庭文庫作りが急速に広がっていった。この運動は自分達の力で子どもたちによい本を読ませたい，読書の楽しみを与えたいとねがうボランティアとしての母親たちの手によって進められていった。また，この運動は多くの場合単なる文庫作り運動にとどまらず，自分達の住む地域社会に公立図書館を新設したり，既存の公立図書館をいっそう改善・充実して住民へのサービス向上を求める図書館作り運動と結びつくことが多かった。

表１　地域・家庭文庫の推移(3)

昭和31年	163文庫
46年	265文庫
51年	2,064文庫
56年	4,406文庫

昭和45年２月，日本図書館協会文庫づくり運動調査委員会では全国の文庫を調査・分析し，その結果を「地域・家庭文庫の現状と課題――文庫づくり運動調査委員会報告――」と題して発表した。それによると配付した調査票4,984組，回収した回答502組，同委員会で設定した基準に合致したもの265文庫であったという。(2)これら地域・家庭文庫の実数は把握しにくいが，日本図書館協会編集・発行の「日本の図書館」及び児童図書館研究会編集・発行の「年報子どもの図書館」によると，昭和31・46・51・56年における地域・家庭文庫の推移は表１のとおりである。

2　今後の課題

昭和40年代に入ってから活発化した文庫・図書館作り運動は，その後も各地で積極的におこなわれている。子どもによい本を与えたい，われわれの街に利用し易い公立図書館を作ってほしいという，ごく単純・素朴な原理に支えられたこの運動の中には，たとえば本稿で紹介した三鷹市，堺市の事例のように，地域の他の文庫などとの連携組織を作って，文庫・図書館作り運動に関する学習会や地方自治体に対する陳情・請願をおこなったり，時には文庫・図書館作り運動の枠を超え，教養・趣味のための幅広い学習活動にまで発展する場合が多い。

このように，自ら作り，計画し，実践していく文庫・図書館作り運動は自主的な地域の中の生涯学習活動であるとともに，住民運動であるともいえる。そして，このような運動が活発化した背景としては昭和40年代に入って台頭した生涯教育思想や学習社会論の影響もさることながら，同年代におけるわが国の公共図書館の発展，地域住民の公共図書館に対する関心と利用の高まりなどが要因となっている。

このような文庫・図書館作り運動が当面する課題としては，

① 文庫作りのための施設の確保

② 必要な資料，特に，新刊児童図書の入手

③ 文庫運営のための資金・労力の確保

④ 関係団体，特に，地域の学校・公立図書館及び他の文庫などとの連携・協力

などがあげられる。

一方，地域の公立図書館には，これら地域・家庭文庫に対し，

① 児童図書をはじめ，図書館資料の長期貸出などによる資料的援助

② 合法的な方法による財政的援助

③ 文庫作り・経営などに対する技術的助言・援助

④ 集会活動・行事などによる援助

などをおこない，その自主的な生涯学習活動を支援することが求められるであろう。

〔注〕

(1) 日本図書館協会公共図書館部会児童図書館分科会編，こども図書館の手引，日本図書館協会，昭和34，pp. 63～68.

(2) 日本図書館協会編，図書館白書，1980，戦後公共図書館の歩み，図書館法30年記念，日本図書館協会〔昭和55〕p. 38.

(3) 小河内芳子ほか，青少年の読書と資料，東京書籍，昭和58（現代図書館学講座7）p. 27.

事例1 三鷹市における文庫活動について

前橋房美
（三鷹市地域・家庭文庫親子読書会連絡会代表）

三鷹市は人口16万人，近くに井の頭公園や神代植物園などがあるベッドタウンです。

東京の多摩地区では，近年，図書館行政がめざましく発展しました。ところが三鷹市では，本館1，分館2で，最近やっと本館が建て替えられて立派になりましたが，その図書館行政は恵まれたものとはいえません。

そんな環境からでしょうか，三鷹市では文庫活動がとてもさかんです。

私は三鷹駅の近くで，自宅を解放してどんぐり文庫（家庭文庫）を開いております。

毎週水曜日になると，居間の椅子やテーブルを動かし，車庫や廊下にまで本を並べます。

そして広くなったじゅうたんの上で20数名の子ども達がひしめきあって座ると，お話の時間がはじまります。絵本の読みきかせやおはなしをすることが主です。最初の頃は，このほかにわらべうたを歌ったり，手遊びをよくや

りました。この頃は1か月に1回，科学遊びや工作等もしています。そして，子ども達が本を選ぶ時にはそっと助言をします。それに，毎週の文庫の他に，春・秋のおたのしみ会，夏のキャンプ，クリスマス会，新年おたのしみ会等の行事をしています。

月1回の母の会には，人形劇の人形づくりや，手芸をしながら，親睦を深め，勉強会も続けてきました。（月1回）又，会報“どんぐり”を毎月発行しますが，56号までできました。

文庫の運営費は，年1回，助成図書整備をしてその報酬をあてています。

文庫に入会する大部分の人は，「自分の子が喜ぶから」「本好きになるように」といっています。そして，貸出し当番や読みきかせを聞きに子どもについてくるうち，母親も少しずつ，仲間意識が芽ばえ，自分も文庫を支えなくてはと思い始めます。キャンプやいろいろな行事を計画し，実行する——。クリスマス会の人形劇の人形づくりからその練習をしているうちに，母親が夢中になって，楽しくてたまらなくなってきます。

最初は自分の子どもだけしか見えなかった人も，5，6年も文庫にかかわりを持っていると，「文庫のおばちゃん」として，知らず知らずみんなのお母さんになっています。

自分の子どもは大きくなって，文庫を卒業（?）してしまったが，文庫にこないと淋しいから——。と読みきかせをしてくれる人も何人かいます。そして今，子育て真最中の人が，いろいろの悩みを打ち明けると，大抵は「私のところでもそんな事があったわよ。心配無用よ。そのくらい元気でなくっちゃ！」という暖かいはげましの言葉にホッとする人も多いのです。そして若いお母さんの中から，「文庫に入れていただいてから楽しくって。なんか目の前がパァーと明るくなったような気がする」「人生に張りが出来て，もっと頑張らなければとファイトがわいてきた」などの声が寄せられると私も心がはずみます。

私が自宅で文庫をはじめようと思ったきっかけの1つは，長女がとても本好きだったからです。私も子どもと一緒に絵本の素晴らしさを知り，こんな

世界を我が子だけでなく近所の子ども達にもと考えたからです。

もう１つの理由は，近所の人が，挨拶はするが，あまり親しく言葉をかわすこともなかったので，この地域に下町的な連帯の輪を広げたいという願いからです。文庫の子ども達を中心にお父さん，お母さん，お年寄りも協力し合い，子ども達も，同年齢でなく異年齢層で遊ばせて，自然といろいろなことを次の世代に伝えていきたいという夢もありました。

２年間，文庫を開くための準備をしました。文庫をはじめて今年で10年目になります。

そして，私の子どもも大学・高校生になり，ひざにだいて読みきかせをしていた当時２歳の２男も６年生になりました。最初，文庫に入っていた近所の子どもも皆，今は見上げるほどの背丈の大学生・高校生です。

10年間はあっという間に過ぎたようですが，子ども達の成長を見ると，長かったんだなあとつくづく感じます。

その間，文庫活動にかかわった母親は大へんな人数になります。この中で，たくさんの母親が文庫でのかかわりをきっかけにして，Ｐ・Ｔ・Ａ活動やその他の地域活動へと，様々な方向に目を向け活躍しています。又，遠くに引越していった人の中でも，その地域で文庫活動をしている人が何人もいるのです。

そして今，どんぐり文庫は地域にどっしりと根をおろし，そこから枝を広げ，文庫をやめた人でも図書館運動を進めていく時には，いろいろな形で協力してくれます。

文庫をはじめる前に，本についての勉強をしたり，あちらこちらの文庫を見学させていただいたりしながら，先輩の助言を受けたことも，今では夢のようです。

さて，三鷹市にはこのような家庭文庫が６つと地区公会堂を利用して開いている地域文庫13，親子読書会が２つあります。

地域文庫はその活動も様々ですが，会員が多いこともあって，その活動にも限度があり，貸出し中心の文庫も多いようです。しかし，又少し違った趣

きの行事が行われるところもあって，家庭文庫と同じような関係が生まれてきていると思われます。

このような文庫が集まって，三鷹市地域家庭文庫・親子読書会連絡会（以後三鷹文庫連絡会と略称）を結成したのが昭和49年４月です。

この会は，創造性豊かな子どもたちを育てることを目的とした地域文庫，家庭文庫，親子読書会相互の交流をはかり，あらゆる思想信条を越えて活動することを目的としています。代表１名，副代表２名を決め（任期１年）月１回の定例会を開いています。また，定例会だよりを発行していますが，それをつくったり，定例会の司会等は３か月交替で各文庫が順番にやっています。

最初の頃の定例会は，各々が文庫の悩みを語り合ったり，よい本の紹介をしたり，読みきかせの方法について勉強したりで，会員相互の交流という感じが強かったのですが，その活動も今ではとても活発なものになっています。

三鷹文庫連絡会は，現在，図書館係，学習係，あゆみ係，助成係に分けてその運営を進め，定例会では，係が決めたことを皆で検討するという方法をとっています。これらの係は，

図書館係……図書館行政をより良くするために学習しながら，また，三鷹市の現状を見つめながら行政に対して要望書や陳情書・請願書を出したり，話し合いを持ったりする。

学習係……文庫活動を支えていくための学習会を三鷹文庫連絡会として１年を１期，２期，３期に分けて行う。そのテーマ・学習内容などの企画をたて，講師の交渉もする。

あゆみ係……三鷹文庫連絡会の１年間の活動，学習会の内容，文庫紹介などをもりこんだ「輪を広げる文庫活動」という冊子をつくるための企画をたて，作り上げる。

助成係……現在，市から12万円の助成金をもらっている。又，昭和50年度より助成図書として年間絵本85万円，児童書 120 万円をもらっている。各文庫は，ほしい本のリストを出して，半永久的に貸し出しを受けているので，

この助成策についての世話係。

特に，図書館運動は，三鷹文庫連絡会のあゆみの中でも力を入れてきたものです。

主な活動をここにあげると，

昭50・6　文庫助成に関する請願

昭51・2　図書館5か年計画要望

昭52・7　図書館日曜開館請願

昭52・9　コミュニティ・センター図書室について，市長，コミュニテイ課長との話し合い。

昭53・5　三鷹市基本計画（素案）に対する意見書提出

昭53・7　図書館を考える会発足（現在図書館係と名称を変えている）

昭53・12　東部分館の建設構想素案に対する意見書提出

昭54・10　専門職制度確立についての要望書

昭55・2　本館建設準備のための図書館建設委員会設置について要望書提出

昭56・1　図書館協議会について要望書提出

昭56・6　芸術文化センター図書館本館建設構想市民会議に代表出席

昭56・7　助成策に関する全国調査をする。

昭56・8　「私たちの望む三鷹市の図書館」を発行

昭56・8　芸術文化センター図書館本館建設構想案に対する意見書提出

昭56・12　「文庫運営費助成に関する要望書」提出，文庫活動費補助金12万円が新規に計上される。

昭57・8　三鷹市の「図書館改築計画について」に関する要望書提出

昭57・9　三鷹駅前図書館に関する陳情書を提出

昭58・10　「新本館図書館サービスの充実について」要望書提出

昭59・3　市の電算化について公開質問状を出す。

昭59・3　昭58・3と同内容の陳情書提出

このようになっています。形として表面に出た他にも市会議員へのお願

い，図書館長・図書館職員との話し合いや，教育長や，企画室，その他対市交渉でずい分時間をかけました。

学習会も，最初の頃は，文庫をやっている者が15名ほど集まり，清水美千子先生の指導のもとに月１回続けていました。皆，幼児をつれて，だっこしたり，自主保育しながらのそれは大変なものでした。

今では月に２回，公民館で保育をしてもらいながら，私たちで年間計画をたてて進めています。10年の学習会のあゆみをみると，よくこれだけの学習会を続けてきたものだと，自分自身で感激してしまいます。

ちなみに58年度の学習内容を示しますと

年間テーマ――今こそ子どもに本と遊びの豊かな世界を――

≪Ⅰ　期≫

① 文庫活動を通して感じた事のグループ討議

② 科学あそび「木をかこう」

③ 講演「子どもの成長と親の生き方」　関　日奈子氏

④ 実演「ペープサートをつくろう」

≪Ⅱ　期≫

① 講演「読みきかせの必要性と比べ読み」

② 講演「絵本の選び方」２回　清水道尾氏

③ 実演（ブックトーク・読みきかせ・ストーリーテリング・語り）文庫の母親がする。

④ 講演「おなべから北斗まで」神沢利子氏

⑤ 神沢利子氏の話を聞き，本を読んでの感想

⑥ 科学あそび「ろうそくづくり」

≪Ⅲ　期≫

① 講演「本を通して見た子どもの文化状況」　清水真砂子氏

② 文庫の交流――各文庫のクリスマス会等での人形劇，ペープサートその他の紹介

③ 昔話の実演とそれについての話し合い

④　講演「昔話の語り口の特徴」小澤俊夫氏

文庫連の特別講演会として

「昔話が語る人間像」　小澤俊夫氏

のような形で行われました。

今年度は「昔話を子どもたちに伝えよう」という年間テーマのもとにⅠ期の学習会が進められ，大島広志氏による，「昔話いろいろ」という講演会を2回行い，文庫の母親で昔話の本の紹介と実演，さねとうあきら氏に「自作を語る」という講演会をしていただきました。

今まで続けてきたこの学習会は，文庫活動をしていく私たちにはなくてはならないものとなっていますし，新しく文庫にかかわった人々にとって，力を得る場所になっています。そして，学習会でのかかわりの中で会員相互の親睦を深めるとともに，その資質向上のため大いに役立ってきたと考えております。

さて，三鷹文庫連絡会では，三鷹駅前にぜひ図書館をつくってほしいという声をあげてきました。駅前図書館は，その周辺の人々だけでなく，三鷹駅を乗降する多くの市民のための利用度の高い全市的な図書館になると思い要望を続けてきました。

しかし，地域住民としても運動をしていくことが大切と考え「三鷹駅前図書館（分館）をつくる会」を57年7月に発足させました。

会員を増やし，映画会「よい図書館とは」，講演会「市民がつくるよりよい図書館」「駅前図書館の必要性」を行ったり，各地の駅前図書館を見学しました。

そして行政に「駅前図書館をつくってほしい」という主旨の陳情や請願をしています。そして，市長との話し合いも持ちましたが，基本計画にないということで行政の壁は厚く，牛歩のごとく，一歩一歩その運動を進めていくほかはありません。

最初は，自分の子どもだけでなく，近所の子ども達にも本を読ませたい，本を読む楽しみを子ども達とわかち合いたい，そして，近所の人々との連帯

の輪を広げていきたいという素朴な気持ちからはじめた文庫活動でした。

それが，三鷹文庫連絡会へのかかわりを持つようになり，先に述べたように，いろいろな活動を進めてきました。

そして今では，地域に公立の図書館を求める運動（図書館づくり運動）に発展してきました。図書館運動は行政当局への要望が主であるだけに苦労が多いのです。

図書館についてよく知るために学習を続け，一生懸命要求するのですが，なかなか行政にその思いが通じません。私たちの願いはなかなかかなえられず，悪戦苦闘の末，むなしい思いにしずんだことも度々です。

しかし，その都度，仲間同志が手をとりあって，勇気をふるい起こして来ました。

図書館づくり運動も，文庫活動と同様に，私の一生の付き合いとなっていくのではないかと思っています。

良い図書館づくりを求め，そして作らせ，こんどはその図書館を充実させてゆくのがこの運動だと考えています。

そして，私は時々，孫の手をひいていつもその図書館を利用する未来の自分の姿を想像して，微笑んでしまいます。

この長い長い道のりがあるからこそ，又，力がわいてくるのではないかと自分自身にいい聞かせています。

そして，私は，毎週文庫に集まってくる子ども達のきらきらと輝く目，本を心から楽しんでいるその姿に，どんなに感動を覚えたことでしょう。又，文庫活動で得た友は，私をどんなに励まし，救ってくれたことでしょう。

図書館運動となると，つい無理をして，体調をくずしてしまうこともこの10年間に何度もありました。その度に，近所の人々の暖かい励ましや友情に勇気づけられ，今まで，いろいろな活動を続けてくることが出来ました。

文庫活動は知らないうちに，私の生活の中から切り離せないものになっていました。いつも手許に子どもの本があり，子どもが集まり，多くの人々との輪が広がっていく——。

そして，それは，私がおばあさんになっても変わらぬ姿だと思っています。

事例2　地域社会における生涯学習

田　中　和　子
（泉北教養講座代表）

昭和48年1月から10年間の「泉ケ丘に図書館を作る会」の住民運動の活動を通して読書環境を整えてゆき，泉北ニュータウンに文化の芽を育ててゆくことに力を入れる一方，主婦たちの手で生涯学習の場を自主運営していることをまとめてみました。

(1)　「泉ケ丘に図書館を作る会」発足

現在人口16万人を越す泉北ニュータウンは，泉ケ丘，梅美木多，光明池の三地区の三つの丘陵地からなる人工の街です。

大阪府が千里ニュータウンにひきつづき住宅政策として大規模な宅地開発を行いました。

入居は，昭和42年12月より始まりましたが，泉北高速鉄道が，昭和46年4月開通するまで陸の孤島と呼ばれていました。

私は昭和47年に，千里ニュータウンから移って来ました。

赤字財政の堺市は，大阪府に対して泉北ニュータウンの住宅建設を3年間まってほしいと要望した位学校建設に追われ，そこで生活している住民のことは考えることも出来ない状態でした。

昭和47年9月，泉ケ丘地域の単一ＰＴＡの中から「こうした状態でよいのだろうか」と声が上り，泉北ニュータウンのマスタープランの中にある「図書館」はいつ出来上るだろうかと質問されました。

この問題が地区の集りに提案されました。その結果，泉ケ丘地区周辺の小・中学校，ＰＴＡ会長が発起人となり「泉ケ丘に図書館を作る会」が結成されました。

昭和48年1月から活動を開始，公共図書館の早期建設をめざして大阪府，

堺市へ陳情を行いました。

住民の盛り上りを示そうと短期間の間に，21,115名の署名を集め，大阪府議会，堺市議会へ提出し住民運動を展開させて行きました。

私は，ご飯よりも本が好きで，堺市に移るとすぐ高い交通費と，片道1時間以上もかけて堺市立中央図書館へ週3回位通いつづけ本に接していました。

図書費が少なく，新刊書は望めませんでしたが，蔵書は多くありました。

中央館を利用している人たちで図書館友の会が発足し私もその中に加わり図書館の人たちと交流も持てるようになってゆきました。

せめて自動車文庫の巡回をと要望していたのが実り，昭和49年4月，泉ケ丘地区に自動車文庫がやって来ました。これを記念して6月読書の輪を広げようと「読書会」を発足させました。又子どもたちのためにも「読みきかせ」をはじめました。

「読みきかせ」グループを作り，よい絵本の選び方，ストーリテリング等の勉強会も行い，地域の子ども会，保育所に出かけ，毎週3冊の絵本を子どもたちによみきかせ，一つの活動として定着させました。

すべてこの絵本は図書館から団体貸出を受けたのですが，毎月絵本をかついで帰ったこともなつかしい思い出です。又住民対象の「読書会」も助言者に，教育長や図書館長，社会教育部長などを招き開きましたが，参加する人達も増えて来ました。

(2)　地域文庫「泉ケ丘図書室」の誕生

活動を伴った要望が大阪府，堺市に聞き入れられて，活動の拠点となる地域文庫「泉ケ丘図書室」が泉ケ丘地区の若松台近隣センター内の一室に設けられました。これは大阪府が堺市へ貸し，それを私たちが借り受けて昭和50年4月オープンしたものです。行政の理解もさることながら，地域の人々の連帯，ボランティアのたくさんのお母さん達の手伝いのもとに子どもたちは本に接することができるようになりました。

図書館と同じ様式で，年間登録者も2千人近くあり，週2回，水・土曜日

1時30分～4時迄すべて自主運営いたしました。

子どもたちとの楽しい行事，児童文学者を迎えての話，図書館の必要性，どんな図書館がよいのか，住民の方々と一緒になって考える勉強会や見学会を次々と企画しました。

昭和53年9月，行政と「新しい図書館」の基本設計案について話し合いました。

いずれ建設される図書館の機能が十分生かされるように，私達の活動も長期展望の上に立って「育てよう文化の芽を」「生涯教育の場としての図書館」をテーマに活動の柱としました。

例えば54年1月「これでよいのか泉北ニュータウン」――育てよう文化の芽を――と住んでいる地域社会を見直す機会を作り，人工の街に文化を創って行こうと呼びかけました。

54年11月「泉ケ丘図書室」5周年記念行事として，「絵本で結ぶこころとこころ」をテーマにハンディを背負った子どもの詩に関西のイラストレーターが絵を贈って出来たわたぼうしの絵本の原画展を企画し，地域に出来たデパートを会場に借り，奈良たんぽぽの会と話しあい，毎日新聞社，近畿NHK，堺市教育委員会等の後援を得てはじめて図書室から外に出た大きな行事を行い大成功をおさめました。

① わたぼうしの絵本原画22点

② 外国8か国の絵本100冊

③ 泉北地区小学校が推薦する本100冊（小学校にアンケートを出しました）

④ 泉ケ丘図書室が推薦する絵本60冊

⑤ 泉ケ丘図書室5年間の登録者数，貸出冊数，年齢別等一目でわかる表

泉北高島屋で一週間催し，たくさんの人々の関心をひきました。

55年1月には文化を育てて行く上に役に立つよう「泉北俳句展」を大阪府立中之島図書館の協力を得て開催しました。

堺市の郷土の歌人与謝野晶子に関したものは割に教育委員会，図書館にあ

りますが，新しい泉北ニュータウンの人達は知らないでいます。そこで広く知ってもらおうと「郷土の歌人与謝野晶子展」を泉北高島屋で11月６日～11日まで行い，市で保存されている百首屏風など大きいものまで出品し，与謝野晶子のセミナーも期間中に入れて学習もしました。

泉ケ丘地区に，国立子どもの城の誘致がきまり，図書館建設用地も変更されたりしましたがようやく決定しました。すかさずこれを記念して「万葉の心」をテーマに犬養孝氏を迎えて講演会を行いました。

住んでいる人達も大阪市まで出かけなくても色々と文化的な行事がふえて喜ばれました。

55年５月，泉北ニュータウンの各種団体の参加する「泉北みどりの集い」の中で「みんなで話そう泉ケ丘図書館」をテーマに大阪教育大学の塩見昇氏を迎え，公園をみちゆく人々の参加のもとに話しあいました。

７月には更にこれを発展させ「泉ケ丘図書館を考えるシンポジュウム」を開きました。

助言者に松原市民図書館長拝田真證氏を招き，図書館の職員の方々，図書館を利用してゆく団体の方々，住民の方々で色々なことを話しました。もう建設されることが決まっていましたからどんな図書館にするかということを討議し，最後となる10回目の陳情書を３日間机の前に座りこんで書き上げ堺市に提出しました。

陳情10回。請願１回。要望書はどれだけ書いたでしょうか。ＰＴＡを母体にしていましたが毎年役員が交替されますので事務局を作りすべて事務局に一任させて頂きました。

長い運動を支えたものその一つに実践活動の「泉ケ丘図書室」での地域とのふれあい，子どもとのふれあいがありました。

私はこの「泉ケ丘図書室」の活動に高齢化社会になって趣味をもたれるお年寄りにも参加してもらおうと泉北俳壇，泉北歌壇をもうけ，地域の新聞に欄をもうけてもらい，一さいの世話を引き受けて来ました。

５周年を迎えたこの活動は地域の文化の振興に貢献したとして大阪府知事

賞を頂きました。俳句も短歌も私は好きでした。自分一人勉強するのではなく，地域の人達が学ぼうとすればそこに場がある，そういう地域社会にしたかったのです。子どもが，本を読まないと言う前に子ども達に本が読める環境を作るのが私達大人の責任だと信じて来ました。

昭和58年７月１日，念願の泉ケ丘図書館はオープンしました。

貸出冊数83年７月～84年３月迄，684,835冊。利用人数241,009人。月平均76,100人。

毎月の利用者人数を10万人越すよう努力したいと職員の声も明るいものがあります。

登録者も84年５月末で43,707人。

０～12歳	18,809人
13～15歳	5,225人
16～18歳	2,226人
19歳以上	16,075人
他館カード	1,372人

男，18,971人。　女，23,364人

今迄運動してきた者にとっては嬉しい数字です。しかし図書館の活動が単に本の貸出しだけに終わらないよう，集会室の利用を含めて地域住民に利用される図書館であり，コミュニティづくりの中心になるよう願っています。

(3)　生涯学習の場としての「泉北教養講座」自主運営について

昭和48年，私達が図書館運動をおこした時，堺市でも，ＰＴＡ活動の目標は生涯教育についてでした。陳情の中にも，生涯学習の場としての公共図書館を一日も早くと訴えました。

地域文庫「泉ケ丘図書室」の運営をしながら，子どもたちの次には主婦を対象に考えなければと毎日のように思いつづけていました。

そんな時，市立図書館友の会で行われた「万葉講座」が，一年で中止になりました。泉北ニュータウンから受講されていた方からどうしてもつづけてほしい，泉北ニュータウンでやってほしいと相談がもち込まれました。

昭和54年頃，堺市では成人学級の中に，万葉講座が，春秋二回あり申し込み多数で抽選でした。一つのテーマを一年間通して学習するということも必要ではないかと自主運営することにして「泉北教養講座」と名づけました。大阪まで出かけて高い月謝を払って学ぶのではなく，片道の交通費で住んでいる地域の中で近所の人々と一緒に学ぼうとすればそんな場があるということが大切と思い，一番はじめは希望する人びとのあった「万葉集」を取り上げました。

昭和54年6月「万葉のひとびと」10回シリーズとして毎月1回ということで開講し1回300円参加費を頂きました。会場費を減免して頂いても14,400円支払い，講師の謝札を支払って自営して行けるかどうか不安でしたが300人近くの方の参加で自主運営の見通しがたちました。

55年4月より「源氏物語講座」と「特別講座」を加えました。

源氏物語は大谷女子大玉上琢弥氏を迎え，特別講座は，生活している地域社会の問題を取り上げ，老人問題，婦人問題，地域福祉のシリーズと，堺の史跡，近畿の史跡，市民能文楽鑑賞と学習のプログラムを各講座の運営委員会で話しあい役員会にかけてゆきました。

丁度，国連婦人の10年の中間年，大阪府が全国に先がけて行った「大阪府婦人問題アドバイザー養成講座」を私は受講しました。

4か月間一日も休まず通い続け，第一期生として修了したことは，私自身は勿論，泉北教養講座にとってもプラスになったと思います。

同好会的なものになりがちな学習する場を地域社会で同じ生活課題を解決するためにはどうしたらよいかを考え，女性の社会参加，精神的自立の大切さをテーマに選び，みんなの協力によって泉北教養講座の運営に当ることが出来たのです。

会員制を取らず，住民が学びたい講座に参加することで成り立つ自主学習ですから住民にとって魅力ある講座でなければなりません。古典の万葉集，源氏物語講座であっても，一年の終わりとか或は5周年を記念して東京から中西進氏を招いて「万葉の自然」の公開講座を行ったり，源氏物語講座も絵

巻のスライドを公開したり変化をもたせました。

特別講座では，５年間取り組んできた老人問題を地域の人達と一緒になって考えようと，「考える高齢者社会――地域の活動を通して―」というシンポジュームを開きました。

パネラーに地域の保健所の保健婦さんや，堺市ろうあ者福祉指導員，社会福祉協議会のボランティアの方々を迎え，府大社会福祉学部の奈倉道隆氏を助言者にみんなが発言して本当に考えあうよい会になりました。

――国連婦人10年の最終年にむけて――婦人問題も企画の打ち合せに入っています。

学習するということを広くとらえれば「経験による行動の変容である」と言われ，しかも変容の結果だけでなく，その過程もまた学習となるといわれますが，自主講座を運営して行くことも学習であると思うのです。

泉北教養講座に参加している人たちは特に子育てを終わった人，30代後半から40代の人といわゆる老後の人達が多いです。

今子育て中の人はやはり少ないです。子育てを終え，老後に入るまでの時期の人々の生涯学習の場ということがまさに言えると思います。

昭和57年，大阪府海外婦人問題セミナーの一員としてイギリス，フランスを訪れ，婦人問題を中心に，女性の地位向上をめざして，両国民がどんな活動をしているのか，雇用，医療，福祉，教育など率直に見聞しました。

昭和58年には，福祉の原点を求めて，スウェーデン，デンマーク，東ドイツを訪れ，地域福祉，平和の問題，婦人問題，男女平等などみて来ました。国際交流，国際的視野に立って物を考える，外国を知ることは家庭生活を含めて社会を基盤として各自の生活を位置づけ，個人の人権を基本とする個の確立，相互の尊重が平等につながって行くのではないかと思い，リーダーとして一つの団体を運営して行くためにはやはり私自身もたえず勉強してゆかなければならないと思って，本を読むこと，その他色々と情報を集めて勉強しています。また，各講座の運営委員さんの研修費も出して，勉強してもらっています。

(4)　泉北教養講座の課題

昭和58年度，北陸，中部，近畿地区婦人問題推進地域会議において，大阪府を代表して活動の事例発表をしました。

その時パネルディスカッションで，パネラーの神田道子氏の言葉を引用して今後の課題にしたいと思います。

私は教育が専門なので，新しい地域を作る活動と学習との関連から，泉北教養講座の事例を取り上げ考えてみたいと思います。

何もなかった土地に突如として出来上った新しい地域に，活動や学習がどう関連して行ったらよいかを一つの事例を事例として看過せずに考えてみたいと思ったからです。

似かよった人達が一挙に地域に移り住み，同じ生活問題をかかえた時，何から動き出すか，泉北の場合子どもの文化的環境づくりから入ったことは，人が連帯を求めて集って来る重要な要因であったと思います。

しかし同時に読書会で女の生き方を学んでいます。この事によって今すぐの問題と長い目で考えなければならない問題とが見えてきたのではないかと思います。

陳情や要望をくり返す一方自主的な文庫活動をやる，これが何かを作り出す上に非常に大きな力になると思います。

図書館を作る等建設計画についても，具体的な意見が出せるのです。子どもから出発し自主的活動と図書館建設問題が結びつき，その中間に女性の生き方を考える学習講座を入れながら，自分たちの生き方を確かめ，更に発展して地域の住民が参加できるような学習の場を作っています。

ただ一つ最後に問題点を申し上げます。

この地域で男性がどういう参加をしているのか，女性が地域活動，男性が猛烈社員では，依然として性別役割分業が続いて行くことになります。そこを乗り越える必要があり，そのためには女性の生き方を学びながら複眼的に運動の見通しを学習の中で持たれることを望みます。

以上のように会場で理論づけて頂き，私もこれを一つの課題にしたいと思

いました。

泉北教養講座の活動の中心となっている泉ケ丘市民センター（泉ケ丘図書館）は，私達の住民運動が実った文化施設であり，泉北ニュータウンで初の文化施設となりました。

3階の大ホールは，泉北教養講座の活動の上に立って300人収容出来るホールをと要望陳情をお願いし，実際それだけの人を集めて地域で活動していることが認められて出来ました。

スライド，映写と視聴覚の設備も完備して活動しやすくなっています。

現在私はもう一つの活動の場，泉北文学学校を自主運営しています。

ここは，男性も含め年齢も若く，ものを書くこと，創作をすることの勉強の場としております。58年より地域福祉に取り組みボランティア活動をはじめ，現在障害者の独居老人宅へ夕食を週一度運ぶグループ「にんじん」を作りました。心の豊かさとふれあいのある文化と福祉の街にするためがんばっています。

8月4日と5日，泉北まつりと称してニュータウンをふるさとにしようと住民サイドの祭があります。毎年泉北まつり協賛泉北俳句大会を催し定着して来ました。

あらゆる分野にもう少し私もがんばりたいと思っております。